

〈書評〉

田村梨花・三田千代子・拝野寿美子・渡会環 / 共編

## 『ブラジルの人と社会』

上智大学出版 2017年

神田外語大学 舩方周一郎

### 1. はじめに

本書の書評を書くようご依頼を受けた時、評者はこの仕事をお引き受けするのを躊躇った。本書を執筆された編著者の一人である三田千代子会員は、評者の学部時代の指導教員だからである。評者もまた後述する「ブラジル社会論」の受講後に研究の道志した者の一人であるが、卒業論文の執筆を通じて自身の関心が政治学・国際関係論の諸問題に移り別専攻に進学したことで、三田会員の指導の手から離れることになった。しかし結果として研究対象は再びブラジルに戻り、評者とブラジルの関係は切っても切れないものとなった。いまや評者は、客観的にはブラジル地域研究者と認識されているのかもしれない。したがって評者は三田門下ではないが、会合には時々顔を出しながらその教えをつまみ食いして、ブラジルの研究を進めてきた。だからこそ、現在の評者の研究の立ち位置があるのも確かである。書評のご依頼があったのも、こうしたご縁によるものであるし、これも三田会員や共編者への不出来な元弟子の務めだと考え直して、お仕事を引き受けすることにした。というわけで、評者はあくまで政治学・国際関係論の学徒あるいはブラジル地域研究者としての立場から書評を書くことをご容赦いただきたい。

本書は、多様な民族と文化により形成されてきたブラジル社会を俯瞰するブラジル研究の入門書である。その本書の根幹となるのは、上智大学で1982年に開講された「ブラジル社会論」の講義での蓄積によるものである。特に三田会員を除く編者たちは、この講義を出発点として研鑽を積み、現在は日本国内でブラジル社会研究者として教壇にたっている。こうした背景をもつ本書の目的は、多人種・多文化社会として多様性を備えながらダイナミックな展開を遂げてきたブラジル社会を理解して、社会の形成過程および住民の多様性の把握を通じて、地域研究としてのブラジル研究を提示することにあるという。

まず日本におけるブラジル研究の普及と後進の育成に寄与することを狙いとする

本書は、コラムも充実している。これらのコラムは、ブラジル社会を学ぶ学部生には自身の問題意識に引きつけて「地域研究の第一歩」となる研究調査の素材となるかもしれない。一般読者に対してもブラジル地域研究の重要なテーマが現代社会においてどのような現象として生起しているのかを明示するものであり、全体として読者を飽きさせない読みやすい書となっている。ブラジル社会がもつ文化を複眼的に捉える深い洞察が含まれていることから、ブラジルを事例に社会学を学ぶ学徒だけでなく、ブラジル政治経済を中心に現状分析をされている企業人や、他のラテンアメリカ諸国の研究者の方、広く途上国世界と日本との間で関わりをもつ方にも有益な書となるだろう。

## 2. 各章の要約

ブラジル社会の成り立ちと世界観にも配慮した本書は、序章と終章および全4章に加えて、全15のコラムから構成される。序章「多人種多民族社会ブラジル—ブラジル社会概観」では、社会文化的多様性と格差に特徴づけられるブラジル社会を概観する。ブラジルは世界で5番目、ラテンアメリカの中では最大の人口と地理空間を誇る大陸国家を住民、気候、地域といった区分から多様に分類される一方、南米唯一のポルトガル語国家としての統一性が保たれてきた。また現代につながる貧富の格差など社会経済問題は、20世紀以降のグローバル化の影響を受ける以前に、植民地時代からの伝統が続いてきた結果であるという歴史的事実も指摘している。

第1章「社会形成の歴史」では、多人種多民族社会の形成の歴史と社会成層化の過去と現在を比べながら分析を行っている。まず奴隷制は大土地所有制及び家父長制度と一体になっており、砂糖キビ農園での奴隷制社会における差別の正当性は家父長制に求められた。1822年の独立後も、奴隷制と家父長支配のもとで社会の多人種多民族化が白人と黒人と先住民、多様な身体的特徴を有する混血化を促進した。しかし奴隷制の廃止により、労働力不足を解決する必要に迫られたコーヒー農園主は農園で働く労働力を確保するため、賃金労働者としてのヨーロッパ移民の導入を図った。大量の移民の導入は、従来のブラジル住民の民族構成に変化をもたらした。人種主義の影響をうけて脱アフリカを目指したブラジル政府は、住民を白人種の身体的に近づけようと、白人化のイデオロギーを形成した。その結果、異種族混淆を通じて温情な人種関係を形成したブラジルは人種差別や偏見はない人種民主主義の国であるという言説がうまれた。同時に国家統合に伴って、各種の人種は個別のアイデンティティを維持しつづけるのではなく、ブラジル人というナショナル・アイデンティティを共有することが期待された。軍事政権を経験したブラジルにおいて多人種多民族が承認されるのは、1985年の民政移管を待たなければならなかった。なお、本章で特筆すべ

きは、とある方がジャポネスと身体的特徴によりいじめられたエピソードである。ナショナリズムの時代に形成された日本移民に対する偏見から日系人が解放されたのは、21世紀を迎えてからのことであるとの指摘からは、一般に日系人の歴史を語る際に「ジャポネスガランチード」＝日本人は「働き者」で「正直者」とみなされる観念が、実は近年になって構築されたものであることを読者に悟らせる。

第2章「社会制度—宗教と家族制度」は、ブラジル社会が形成される過程で重要な機能を果たした宗教と家族制度という社会制度に注目している。ブラジル社会の特徴として宗主国ポルトガルから植民地ブラジルにもたらされたカトリック教はブラジルの国家統一をもたらす人々の精神的基盤となり、家父長制とともにブラジル社会の重要な社会制度となってきた。しかし共和制の導入とともに教会が国家と分離してから、カトリック教徒の割合は減少傾向となる。現在では、プロテスタントを代表とする他宗教の信者が増え、脱カトリック化の傾向が見られる。確かにカトリック教会はブラジル唯一の公的宗教であるが、現実には多様な宗教がカトリック教会の影響を受けながら存在している。さらに家父長制の効果により、数世紀にわたり男性は支配する性、女性は従属する性として扱われてきた。しかし20世紀に生じた社会・経済・文化の多様な変化が、ブラジルの根強いジェンダー偏見や差別に見直しを迫り、家族の小規模化などの多様な家族形態を生み出している。

ここまでの章は、20世紀以前のブラジルの社会史に焦点を当てた構成となっている。以下の第3と第4章では、特に20世紀後半からのブラジルの変化に注目している。第3「社会的公正への挑戦」は、都市化と人口移動、および民主化と社会開発といった変化をふまえた後、社会運動と市民、および女性のエンパワーメントとジェンダー平等などの議論が展開される。ブラジルに存在する社会格差を捉える際、都市化と人口移動により生まれた地域格差も重要な概念である。農村からの都市への人口移動により、都市の人口は急速に拡大した一方でスラムを形成した。さらに中西部を拠点とした農業開発はセラードやアマゾンの環境破壊と先住民の生活を脅かした。この開発事業自体は植民地時代から軍事政権期を通じて実施されてきたが、その期間に社会の不平等を経験したブラジルは、軍事政権期の反省を教訓として、1985年の民政移管後、全ての人の基本的人権を保障する1988年新憲法を制定した。この憲法の制定には、民主化の推進力となった社会運動の功績も大きく、憲法下で市民権の概念が浸透することになった。2013年6月に発生した大規模抗議運動も、民主化過程の中で社会的公正を求めて自ら行動する政治文化に起因するものであった。

第4「グローバル化と人の移動」では、1980年代の経済停滞とともに始まったブラジル人のディアスポラがグローバル化する世界で拡大し、その結果探求されるようになったアイデンティティの行方や文化伝播などを紹介している。特にトランスナショナリズムという視点から、ブラジル人が移住する原因と手段を概観したのち、米

国・欧州・太平洋諸国・南米諸国などで在外ブラジル人コミュニティが形成される実態を提示した。さらにブラジル人の労働と生活・子弟への教育などの側面から日本社会への影響に対しても新たな考察が加えられる。上記の点からも、本書の射程が単に「ブラジルという国内の社会問題」ではなく、「ブラジルという共同体に関わる人と社会の問題」であることが確認できる。

### 3. 論評

本書は「ブラジル」「社会学」「地域研究」「教科書」という位置づけゆえに、読者の立場や関心の違いから様々な読み方ができる。特に、評者は大きく3点に絞って本書を論評する。

第一に、教科書としての意義と課題である。本書は、編者たちの長年の研究蓄積に基づきブラジルという国を捉えるうえで、社会学が対象とする基本的な概念や類型化も丁寧に紹介されている。その意味では、ブラジル社会が抱える問題と是正に向けた取り組みを体系的に整理する従来の教科書の役割は達成しているといえる。その一方で、昨今の教科書のあり方には、アクティブラーニングやプレゼンテーションなど授業形式の多様化に対応して、教科書を「学生に予習・復習のために網羅的に読ませる」従来の形式から、「学生に主体的に考えさせ、実際に自らの問いに向かい、研究させる」形式とするものが増えている（例えば、久保ほか 2016）。

確かに、教科書の内容を授業で網羅的に伝えて「何が問題なのか」を考えさせることは、読者に問題意識を萌芽させる重要な学びの一つである。しかし「なぜ、その問題は起こるのか」、「どうすれば、問題を方法的に解決できるか」という問いを発起させるには、研究者が設定した概念、類型化をただ鵜呑みさせるだけでは難しい。むしろそれらの妥当性を批判的に検討する思考法を学ばせることが重要となる。本書を教科書として位置づけるのであれば、ブラジルという国の諸相を通じて社会学の知見を単に知識として伝えることにとどまるのではなく、それを踏まえて社会学の考え方を学生に身につけさせる（大学の授業カリキュラムに即して考えれば、履修者の中に芽生えた問題意識をゼミなどでの研究演習として発展させる橋渡しとする）ことを目指す仕掛けがあってもよい。具体的には、各章にポイント・問い・争点などの他にも、関連（議論としては対立）する参考文献の紹介などを載せるだけでも、読み手の主体的な学習へのインセンティブを高められたと思われる。

さらに、周知されるように社会学に代表される社会科学一般には、情報の分析能力やその分析結果を組み立てる能力も求められる。特に、本書がフィールドワークを地域研究の基本的手法の一つと位置づけるのであれば、コラムなどで紹介されたフィールドワークの様子は、調査報告だけを披露するのではなく、編者たちの豊富な経験を



もとに調査の手法や手順・心得なども掲載する章などもつくることで、本書を手にとった読者が本書を参考にして社会調査をする際の一助となるようにすると良かったのではないか。

第二に、ブラジル地域研究×社会学としての本書の意義と課題である。本書を、ブラジル研究者として軍政期から民政移管を経て現在にいたるブラジルの激動期を概説した堀坂浩太郎著『ブラジル 跳躍の軌跡』と対比しながら読むと、同じブラジルという国の発展の歴史を扱いながらも、もう一つの異なるストーリーが展開されていることに気がつく。ブラジル近現代史を「政治・経済・社会の関係」の発展から捉えたのが、堀坂の研究の功績であったとすれば、本書の功績はブラジル社会の形成と発展の道筋を「人と社会の関係」から捉えたものである。その内容は、人類学、歴史学（特に社会史）にも通じていることから、社会学と隣接する様々な分野との融合や広がりの可能性を感じさせる。さらに、ブラジル国内に留まらず、日本を含む世界各国へのブラジル人のディアスポラに注目した点では、研究当事者が居住する地域（つまり日本）の状況も投影することを目指す地域研究の目的とも通底しているとも評価できる。

その反面、ブラジル地域研究寄りの社会学の本として本書を位置づけるのであれば残された課題もある。社会学とは本来、人間と人間集団により構成される社会への本質的な理解に迫るものである。特に「ドクマに挑戦し、文化の多様性についての正しい認識を育成し、社会制度の働きに対する洞察を可能とすることを目指すもの」であるという（A. ギデンズ 2009）。確かに、社会学の射程範囲は広い。本書も最大限に社会学の領域の体系化を試みているとはいえ、A. ギデンズの書に照らし合わせてみると、社会学の重要なテーマが取捨選択されており、编者たちが得意とする分野を寄せ集めた印象が残ってしまう。例えば、一日あたりにインターネット利用に費やす時間が世界一長いブラジルでは、ギデンズが提示したソーシャルメディアはいまや「新しい公共圏」として、TVや新聞・雑誌に匹敵する役割をもち、抗議運動の拡大から汚職捜査の推進、大統領選挙の行方までを左右する対象となっている。若者論や老年学などのライフコースにまつわる研究もまた、世代間の認識の違いによる亀裂の激化や、2035年以降から少子高齢化社会に向かうブラジル社会の未来を占う社会学の重要なテーマであろう。

こうした研究が本書で取り上げられなかったのは、编者たちの質的調査に対する選好に加えて、以前は問題意識に見合った方法論が確立していなかった技術的な制約もあったのかもしれない。しかしビックデータが全盛期の現代において、量的調査を活かした社会調査法は、ブラジル国内でも目まぐるしい発展を遂げている。もちろん本書はブラジル研究の入門書と位置づけられているので、初学者に対して難解な印象を与えない配慮は必要であるが、今後は時代の潮流を読み、統計分析などの量的調査と質的調査を組み合わせるなどの同分野における実証研究の発信も期待される。

他方で、本書を社会学寄りのブラジル地域研究の本として位置づけるのであれば、評者には本書が「社会と国家の関係」という視点を欠いている印象を受けた。例えば社会制度の形成は、確かにブラジル社会に根強く残る不平等な構造に変革をもたらそうとする市民社会運動の賜物であった。しかしこうした市民社会の活動と政治参加のメカニズムは、時として為政者たちによる政権のパフォーマンスとして、有権者の投票行動に制約を与える政治的道具として利用されてしまう。ボルサファミリアなどのCCT政策も、社会構造の変革のために効果を及ぼそうとする好事例である反面、多くの低中間層が給付金交付に依存した支配構造に組み込まれた現実にも十分な説明が必要だったと思われる。

第三点目は、第二の論点とも関連するジェンダーの問題である。原稿を執筆している2018年前後の時期において、世界全体ではジェンダー・家族・労働にまつわる様々な問題が表出している。これらの問題は近代産業化がもたらした古くて新しい課題である。現在の社会構造の中では、特に社会的少数派として疎外された女性の立場が改めて顕在化している。こうした社会の現状に本書の内容を引きつけて考えた場合、執筆者の多くを構成する女性研究者の視点から、女性のエンパワーメントとジェンダー平等の取り組みが提示された意義は大きいかもしれない。しかし男性優位の構造が維持される社会において、いわば定番な言い回しともなっている「女性の視座も取り入れた内容」として本書の意義が紹介されてしまうのであれば、本書が読者に伝えたかった意図は、十分に理解されたとはいえないだろう。少なくともジェンダー研究の関心は、今日でも圧倒的に女性に向けられてきたが、男性については女性との比較において一般的・抽象的に語られるにとどまる傾向にあるためである。ラテンアメリカの文脈においても、近代化と民主化の過程をへて女性からジェンダーへという視点の展開があったにもかかわらず、従来の日本のラテンアメリカ研究においては、ジェンダーとは実質的には女性を対象としたものであったといえる。確かにフェミニズム運動はラテンアメリカの文脈においても、長らくジェンダー平等のための推進力となってきた。しかしフェミニズムだけにジェンダー平等を推す力をゆだねることは、一方にある男性差別や重労働・兵役など、性役割のうち男性に不利な性差別の撤廃を望む力にはなりえないだろう。

本書においても、実は女性教育への普及の箇所での「教育における男女間格差の是正は、ブラジルでは既に達成されたことになる。むしろ教育分野では不平等な状況におかれているのは男性である。現在、挑戦すべき問題は、男性の教育を拡大することと両性の教育の質の改善となっている」(P. 166)といった文言からも、女性性研究から派生した男性性研究への必要性が暗示されている。それゆえに「ジェンダー概念が両性の関係性を示す概念であることに留意するならば、女性問題の背景を深く理解するためには、もう一方の性である男性にも目をむける必要がある。具体的にいえば、

差別される側の女性の問題に関心があるとしても、男性による女性の差別という問題を解決しようとするのであれば、その問題を引き起こす当事者としての男性が、なぜ、いかにしてそうした行為に及ぶのかを明らかにすること」(多賀 2006) も本書には必要だったのではないか。ただし、価値観の変化・多様化が顕著なブラジルの社会におけるジェンダー形成の様子をより厳密にくみ取ろうと努めるのであれば、同性婚など LGBT の権利に寄り添う家族のあり方からも、男女の二項対立的な性役割の社会化を前提とする枠組みでもなお、単純な構図なのかもしれない。

## おわりに

ブラジルを取り巻く環境は、この数十年で確かに大きく変化した。しかし、その根幹にある「ブラジルらしさ」は変わらないのかもしれない。冷戦の終結以後、世界の多くの国がグローバル化に適応した国家運営を強化したが、そのはるか前からブラジルはグローバリゼーションを受容してきた国だった。だからこそ、新たなものを吸収しつつも多文化主義を維持してきたブラジルは、過渡期に入り始めているとも言われる欧米諸国の国家モデルとは異なる評価が強調されてもよいはずだろう。しかし、本書の冒頭で言及されているように、日本においてブラジルという対象国への認識不足から、地域研究としてのブラジル研究の広がりが限定的だったことへの危機感を評者も共有している。例えば、リオ・オリンピックの開催前後において、日本では「フェバーラ」・「犯罪の多発」といった否定的な報道が拡散されたのも、日本でのブラジルという国への認識不足が、個人経験や伝聞による誤謬を増やし、固定観念の下で安易な情報を求める「人と社会の関係性」を再生産したからと言わざるを得ない。

しかしブラジルで発生する各種の社会問題は、もはやブラジルという「特異な国」のみで発生するものとはいえなくなった。移民と難民、貧富の格差、治安の悪化、汚職などの諸問題は、グローバル社会に組み込まれた現代の日本においても、より顕在化した課題となったためである。二つの国の現実を前に、日本のブラジル研究も「危険で、可哀そうで、助けるべき対象」というブラジルに対する一般認識に追従することなく、「互いの国の問題を共有し、ともに歩いていく対象」としての眼差しに変化が求められている。「果たして日本のブラジル研究は何のためにあるのか」という原点に戻ると、ブラジルに対する日本人の固定観念を打ち破ろうとする本書には想像以上の日本社会へのインパクトが期待される。

最後に、本書は次世代にブラジル研究を引き継ぐ役割も担っている。評者もまた本書が次世代のブラジル研究を担う多くの学生に読まれることを願ってやまないが、日本において学部生から直接に大学院に進学する学生が減少する中では、本書が対象とする読者は今まで想定されなかった層にも向けられてもいいのかもしれない。就職・

結婚・出産・定年などのライフイベントを通じて、学生時代には気がつかなかった「人と社会の構造」に気がついた時、本書は学生とは異なるライフステージにいる多様な読者の問題意識に共鳴する何かがあるはずである。どのような方がどのような目的で手に取ったとしても、本書にはブラジル社会の現実と向き合うために歩み始める一歩を後押しする価値を備えている。

---

参考文献

アンソニー・ギデنز『社会学』改訂第5版、而立書房、2009年。

久保慶一・末近浩太・高橋百合子『比較政治学の考え方』有斐閣、2016年。

多賀太『男らしさの社会学：揺らぐ男のライフコース』、世界思想社、2006年。

堀坂浩太郎『ブラジル 跳躍の軌跡』岩波新書、2012年。